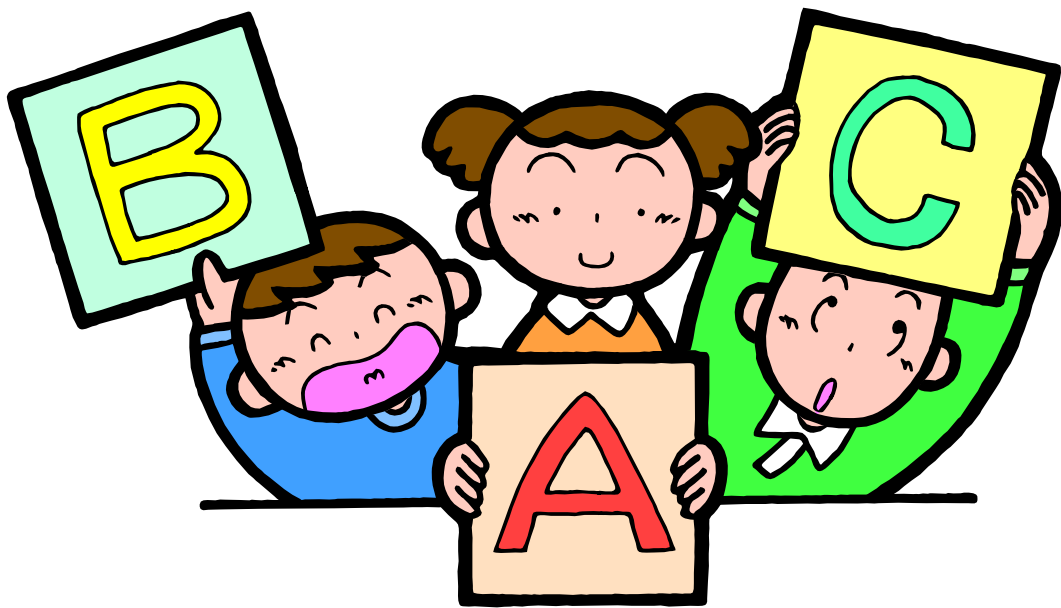


英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする
子どもを育てるための22のヒント

小学校英語活動Q&A



京都市教育委員会
京都市立永松記念教育センター

問1 小学校で英語活動が行われるようになってきたのはなぜですか？

今日、英語は、コミュニケーションを図るための手段として、国や民族を超えて人々に用いられるようになるなど、いわば世界共通語となっています。このような状況の下、我が国でも次の二つの考えから小学校での英語教育が進められてきました。

一つは、これまでの中学校から始まる英語教育に対して、「何年勉強しても英語が話せない」という批判がある中、実践的コミュニケーション能力を養うには、学習開始年齢を下げる必要があるという考えです。もう一つは、国際理解教育の立場から国際化に対応する教育活動の導入が必要であるという考えです。つまり、コミュニケーション能力そのものより、英語に慣れ親しむことで、将来、国際的に通用する表現力の基礎や、外国や外国語への興味・関心、コミュニケーションへの積極的な態度の育成が必要だというわけです。

しかし、この二つは明確に分けられるものではなく、小学校における研究開発学校の実践を見ても、この両者の考え方をいかして目標が立てられ、英語活動が進められています。

問2 小学校から英語活動を進めることに効果はあるのですか？

たとえば、英語圏で生活するようになった場合、学習開始年齢が早いほど、英語の習得効果も高いといわれていますが、それは周囲の会話がすべて英語であるという環境におかれているからです。教室を一步出ると、意識しない限り、普段英語を耳にしたり口にしたりする機会がないという我が国の現在の状況では、学習開始年齢を早めたからといって、英語のコミュニケーション能力が身につくとは言い難いでしょう。

では、小学校から英語活動を進めることにどのような効果があるのでしょうか。中教審答申では、「外国語の発音を身につける点」と「中学校以降の外国語教育の効果を高める点」においてメリットがあるとしています。また、小学校英語に関する研究開発学校はその成果として、子どもが進んで英語を使おうとしたり、英語に限らずコミュニケーションをとろうとしたりするようになったと報告しています。このように、小学校での英語活動の効果は、言語習得そのものではなく、英語を積極的に使おうとする態度の育成と、中学校で教科として英語を学習する動機付けとなる意味で、大きな効果があると考えられます。

問3 小学校での英語は、いずれ教科になるのですか？

平成14年度段階では、影浦攻氏（「小学校英語活動実践の手引」（以下「手引」と略す）作成座長，元文部教科調査官，宮崎大学教授）による「小学校英語の教科化」の発言や，渡邊寛治氏（国立教育政策研究所統括研究官）による「総合的な学習の時間のうち，週1時間は英語活動を行うというような話が出る可能性もある」との発言などが出されています。実際，教科としての可能性の検討のため，平成12年度より，5校が英語科に関する研究開発学校の指定を受けています。しかし，一方で松川禮子氏（「手引」作成委員，岐阜大学教授）は，「教科化には，かなりの条件整備が必要であり，遠い先であろう」と予想しています。

このように，今のところ教科化についての見通しは，はっきりしません。しかし，平成14年7月に発表された『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想で，「小学校の英語教育に関する研究協力者会議」を組織し，次の学習指導要領改訂に向けて3年間をめどに結論を出すこととされたことから，今後しばらくは，人的制度的な条件整備を進めながら「総合的な学習の時間」における英語活動の充実が図られるのではないかと考えられます。

問4 小学校の英語活動と中学校の英語教育は，どのような違いがあるのですか？

中学校学習指導要領（外国語編）では，「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ことを目標に，外国語科を必修科目とし，英語を履修することを原則としています。すなわち，「聞く・話す・読む・書く」の4技能にわたって，文法規則や語彙について学習したことをいかに，場面に応じて，実際に英語を使える能力の育成をめざしています。

一方，小学校の英語活動は，「手引」にもあるように，言語習得を主な目的とするのではなく，英語に対する興味・関心と，英語を活用しようとする態度とを育成することをねらいとしています。このようにそれぞれのねらいが違いますから，小学校で取り組まれる英語活動は，中学校英語の入門期の学習内容をそのまま前倒しするものであってはなりません。小学校では児童期の特性から，「コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度面の育成」を図りながら，英語の「聞く・話す」力を身につけさせたいと思います。

問5 小学校の英語活動は、どのようなことを、どのような方法ですか？

私たちが母語によるコミュニケーション能力を獲得しているのは、生まれてから何万時間も母語によるコミュニケーションを体験してきたからです。ですから、「英語を活用しようとする態度を育成する」という小学校の英語活動のねらいを達成するためには、やはりコミュニケーションを体験させる必要があります。

では、どのようにコミュニケーションを体験させるのでしょうか。



小学校英語活動では、「手引」で述べられているように、「子どもの言いたいこと、したいこと、日常生活に身近なことから」を題材にした活動を通して、「音声中心に、逐一日本語に訳したり、無理に覚えたり、細かい誤りを気にしたりせずに」、その活動を行うのに必要な英語を聞いたり、話したりします。つまり、子どもたちから「英語でコミュニケーションしてみたい」という意欲を引き出すために、子どもたちの実態にあった言語材料が選択され、それが自然に使える活動を設定し、文法や単語の正確さにあまりこだわることなく進められていくことが大切です。

問6 英語活動への取組は、それぞれの学校に任されているのではないのですか？

小学校での英語活動は、現在のところ「総合的な学習の時間」に位置づけられていますから、この時間の趣旨からして各校が地域や子どもの実態などに応じて、その取組を決めることとなります。しかし、実際、平成14年度では、全国の56.1%の小学校が英語活動に取り組んでいます。これは、「総合的な学習の時間」が教育における今日的課題に応える学習の場として導入されたことをふまえ、多くの学校が「これからの社会を主体的に生きる子どもの育成」のためには、英語活動が重要だと受け止めているからだといえます。その意味では、それぞれの学校がその実態や条件に応じて「創意工夫」を凝らしながらも、すべての子どもに「英語を活用しようとする態度を育成する」ことが大切です。そのために、京都市では平成9年度から「きょうと英語フロンティア・キッズ事業」を開始し、平成12年度からは小学校専任の外国語指導助手(京都市はFLTと呼称)の巡回指導を進めてきたことで、現在では「総合的な学習の時間」をはじめ、特別活動や課外活動などを通して、すべての小学校で、子どもたちが英語に慣れ親しむ活動が進められています。

問7 体験することや活動することが中心なのに、なぜ指導計画が必要なのですか？

問5で述べたように、「英語を活用しようとする態度を育成する」という小学校の英語活動のねらいを達成するためには、コミュニケーションを体験させる必要があります。しかし、小学校の英語活動は、日常、英語を聞いたり話したりする機会がほとんどないことから、計画をたて、効率よくコミュニケーションを体験させなければ、それはその場限りの活動に終わってしまいます。

また、子どもたちの中には、家庭や習い事で英語を聞いたり、話したりする環境にある子どももいれば、学校での英語活動以外では英語を一度も耳にすることのない子どももいます。そのような中、単発の英語活動では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することはできませんし、学校間だけでなく子どもたちの間にも格差を生み出すことになってしまいます。どの子どもにも「英語を活用しようとする態度を育成する」ためには、系統的な指導計画がぜひとも必要となります。



問8 「総合的な学習の時間」は各学校の取組に任されているのに、なぜ教育委員会が「指導計画（試案）」を作るのですか？

「総合的な学習の時間」で取り扱う学習活動として他に例としてあげられている環境、福祉・健康などは、小学校教員の今までの指導技術の蓄積で進めることができます。しかし、英語活動は、小学校教員にとってまったくの新しい分野であるため、現在のところ担当する指導者によって、学習が左右される状況にあります。

しかし、「総合的な学習の時間」のねらいである「主体的に問題を解決する資質や能力」「創造的に取り組む態度」を育てる観点から、「英語を活用する態度」をどの子どもにも育てるためには、個々の指導者の資質や子どもがおかれている環境に任されてはなりません。すべての子どもにこのような力を育てていくためには、各校が自校の実態にあった指導計画を作成し、系統的な指導をする必要があります。そこで、全市的な試案となる「指導計画と活動事例集（試案）」（以下「指導計画（試案）」と略す）を作成し提案するとともに、活動を支援していくことは教育委員会の重要な役割だと考えます。

問9 京都市の「指導計画（試案）」は、どのような特徴をもつものですか？

現在，出版社や研究開発校などが作成した指導計画のほとんどは，「買い物」「身近な生き物」などの場面やトピックスを学習内容の軸にし，これらをもとに活動を組んでいます。しかし，場面やトピックスは無数にあるため，その選択と配列が課題となり，計画的系統的に学習を進める上で問題が残されています。

それに対して，京都市の「指導計画（試案）」では「欲求・願望を表明する」「質問をする」などの「言語機能」を学習の軸にしています。私たちは，様々な目的をもち，それに応じて必要な働きをもつ言葉を選択してコミュニケーションを図ります。このような「言葉の働き」を「言語機能」と呼び，母語において，これらは成長とともに順に獲得されていきます。そこで，英語活動でも，母語の言語機能獲得順を参考に配列し活動を組むことで，計画的な学習を進めることができると考えられます。ですから，同じ「買い物」を扱った活動でも，「指導計画（試案）」では，まず学習する言語機能があって，それを使う必然性のある場面や話題として，このテーマが設定されています。

問10 「国際理解」の一環なのですから，言葉ではなく文化の違いを知ればいいのではないのですか？

中教審答申では，国際理解教育を進める上で，「異文化理解と共に，異文化をもった人々と共生する資質や能力の育成」「外国語能力の基礎や表現力などのコミュニケーション能力の育成」を求めています。このように，国際化の進展の中では，国を前提とした国家同士の相互理解を図ることではなく，身近なレベルで文化を異にする人々と共生する力や外国語でのコミュニケーション能力が国際理解に欠かせないものとなっています。

「国際理解」ということから，外国語指導助手（以下 ALT とする）などから外国における生活習慣や行事の学習を中心とする英語活動が多く見られます。しかし，それはその人たちの出身国に限られますし，また彼らが自国の文化を代表するものでもありません。そもそも外国に関する知識を得るには，母語で学習した方が子どもはよく理解できるはずで，英語活動では，異文化をもつ人々との相互理解のために，共通語としての英語でコミュニケーションを図ることが重要であることを子どもたちに気付かせることが大切です。

問1 1 英語活動ですから，英語の歌やゲームで楽しめばいいのではないのですか？

英語活動では，あいさつや歌，ゲームなどを取り入れることで，子どもが自然に英語を聞いたり話したりするような学習が大切です。しかし，歌やゲームは確かに子どもたちの興味・関心を引きつける活動ですが，それ自体はコミュニケーションではありません。たとえば，ゲームをするために，指導者がルールを説明したり，指示を出し，子どもたちがそれを聞いて，その指示に従ったり，ルールについて質問をしたりすることはコミュニケーションですが，あらかじめ与えられている言語材料を使ってそのゲームをすることは本当のコミュニケーションではありません。なぜなら，聞き手はあらかじめどのような答えが返ってくるのか知っていますし，話し手も，初めからどんな質問をされるのか知っているという特殊な状況だからです。ですから，歌やゲームを通して英語の音やリズムに慣れさせる必要はありますが，それだけで終わっていたのでは，子どもたちにコミュニケーションを体験させたことにはならないのです。だから，歌やゲームだけでは，英語を活用しようとする態度を育成することはできないのです。

問1 2 タスクとは何ですか，またそれが活動の中心になるのはなぜですか？

一般的に「タスク」とは，「作業」とか「課題」と訳されていますが，試案では，言語機能，語彙，場面，話題，活動で構成されたものを，「タスク」と呼んでいます。試案では，学習内容として設定された言語機能の具体表現を聞いたり，話したりすることが自然であるような場面と話題とを，児童の生活や学習経験から選択し，そのもとで活動が組み立てられています。たとえば，「様々なことをさせる」という言語機能を使ったコミュニケーションを体験するために，その具体表現として Go straight. Turn right. などの言語材料を自然に聞いたり，話したりする活動として，ALT に学校を案内するという活動を「タスク」として設定しています。このように「タスク」を通して，子どもたちは，自分の意見を表明したり，相手の意向を尋ねたりするなどの自己表現のコミュニケーションを体験します。そのため，歌やチャンツ，ゲーム，クイズはこの「タスク」の補助的な言語活動として設定され，この「タスク」が言語活動の中心となります。



問1 3 英語活動の指導は誰がするのですか？

文部科学省は、「手引」の中で、英語活動は「基本的には学級担任が行う」としていますし、そもそも「総合的な学習の時間」では、「地域や学校，児童の実態」に応じて、「児童の興味・関心等に基づく学習」を創意工夫することが求められていますから，子どもの実態をよく理解している学級担任が中心になって進めることが重要です。

特に，小学校の英語活動では，子どもたちのコミュニケーションへの意欲や積極的な態度の育成がねらいですから，指導者には，目の前の子どもに適した学習形態や体験的な学習を組み立てることが求められます。そして，そのようなことができるのは，子どものことをよく理解している学級担任です。ただ，英語活動を進める際，「手引」でも「英語に直接触れたり，外国の生活・文化に慣れ親しむという趣旨から，外国語指導助手の活用や，多様な授業展開を可能にする協同授業などの授業形態の工夫も必要」と述べられているように，子どもに英語でのコミュニケーションを体験させ，英語を積極的に使う動機付けをするためには，学級担任とALTとのチームティーチングで進める活動が必要となります。

問1 4 専門的な教育を受けていない小学校の学級担任に指導できるのですか？

学級担任は，英語指導の専門的な教育をその養成課程で受けていないことや，英語を教える専門的な知識やその指導法も身につける機会もないため，「苦手だから」「発音が下手だから」と，英語活動に消極的になりがちです。

しかし，問 13 で述べたように，小学校の英語活動には，子どものやってみようと意欲をかき立てるようなコミュニケーション活動を設定することが必要で，それには，子どもたちがどのようなことに興味・関心をもっていて，どのような学習経験をしているのかを知っている学級担任が，欠かせません。このように英語活動を進める上で，その設計と進行は学級担任の大切な役割です。むしろ，学級担任は，「積極的に英語を使ってみよう」とするモデルであったり，子どもの代表として「初めて英語に触れる不安を代弁する」ことができたりするからこそ，ともにコミュニケーションを楽しみ，また，その楽しさを子どもに伝えていく指導ができるのです。

問15 ALTはどのような役割を果たすのですか？

「手引」では、ALTの役割を次のように述べています。

生きた英語の提供者として、自然な英語の使い方や発音を指導する。
異文化の体現者として、外国の様々な習慣や考え方と発想を子どもたちに伝えることができ、外国や外国語への興味を喚起する。



直接授業をすることだけでなく、日本人教師と協力して教材や教具を準備する。

このように、子どもたちに英語によるコミュニケーションを体験させるためには、子どもの様々な反応に対応できる英語力が必要となり、それが提供できるのがALTです。また、子どもたちが、彼らとコミュニケーションを図ったり、彼らが学級担任と協力して取り組む姿に触れたりすることで、自分たちとは習慣やものの考え方などが違って、人間として同じだということに気付いていくことが大切です。京都市の「指導計画(試案)」では、こうしたALTの特性をいかすため、子どもたちに英語のインプットを十分与えアウトプットを引き出すとともに、彼らとの触れ合いを深める「タスク」を設定しています。

問16 ティームティーチングを進めると、どのような効果があるのですか？

「手引」ではチームティーチングによって、授業展開や活動の支援を多様に進め、指導者それぞれの個性やアイデアを出し合うことによって、単独の授業では得難いダイナミックな授業を作り上げることができるとしています。さらに、指導者同士のコミュニケーションや協力ぶりから、子どもは多くのことを学ぶことができるとも述べています。

このように、学級担任とALTとが子どもの前で英語を使って実際にコミュニケーションを図っている姿を見せることにより、子どもたちは英語がコミュニケーションをするための道具であることを実感するでしょうし、何より自分も担任のように、いやもっとスムーズにALTとコミュニケーションを図れるようになりたいと思わせる契機を作り出すことができます。これは、小学校での英語活動のねらいと一致するものです。

ですから、ALTがCDやテープのように決まり文句を言うような活動ではなく、子どもの反応に臨機応変に英語を駆使できるという彼らの特性をいかすために、京都市の「指導計画(試案)」では「タスク」をチームティーチングを進めるようにしています。

問17 京都市の「指導計画（試案）」はどのように活用するのですか？

Step 1 から 4 まであり，各 Step は，それぞれの学年を表すというよりも，英語活動を始めてからの年数を表すと考えてください。また，それぞれの Step は，8～10 の Unit で構成されていますが，これらの Unit は，子どもが言語を用いてコミュニケーションを体験していくために必要な言語機能の習得順に配列してあります。ですから，本来は Unit 1 から順に学習していくことが望ましいのですが，学級の子どもの実態にあわせて取り組みやすいものから活用していただくことも可能です。

1 Unit は，3～7 時間で構成されており，Step 全体では年間 30～35 時間となります。学習内容である「言語機能」を使う活動例を複数示していますので，それらを参考に各校で指導計画を作成し，学習を進めてください。ただし，活動例としてあげている「タスク」は，その Unit でめざす学習目標に迫るための中心的活動として，「チャンツ・歌・ゲーム・クイズ」などは，その補助的活動と位置づけています。ですから，「タスク」は，ALT などとのチームティーチングで進めていただくよう想定しています。

問18 ALT とどのようなことを打ち合わせておく必要がありますか？

打合せをスムーズに進めるために，まず，学級担任は，子どもの実態にあわせて「指導計画（試案）」のどの Step のどの Unit を行うかを決め，その中のどの活動を行うのかなど，単元の指導計画の概要をたてておいて，ALT との打合せに臨むことが必要です。

その上で，来校した ALT にそれを伝え，Unit の目標を達成する上で選択した活動が妥当かどうかを尋ねます。ALT は彼ら同士のミーティングや経験から様々な情報をもっており，良いヒントを与えてくれるでしょう。その活動の中で，どの部分を ALT が行い，どの部分を学級担任が行うのか，互いの役割を決め，次に，それに必要な教材を検討します。永松記念教育センター内「小学校英語リソースコーナー」の教材で使える物，学校にある物，学級担任やALT が新たに作る物など，誰が何を準備するかを決めます。

また，活動後は，短時間であっても，活動が子どもの実態にあったか，教材や役割分担は適切であったか，子どもたちが言語機能の具体表現を聞いたり，発話したりするコミュニケーションの体験が十分であったかについてお互いに振り返ることが必要です。

問19 中学校との連携を図るにはどのようにしていくことが大切ですか？

まずは、小学校の教員と中学校の英語科担当教員が互いにどのような内容をどのような方法で指導しているのかを知り合うことです。そのためには、互いに実際の授業を参観し合ったり、中学校の学習指導要領（外国語編）や英語科教科書、小学校での英語活動の指導計画や教材を検討し合ったりすることが必要です。

特に、同一校区の小・中学校がそれぞれの学習の実際を理解し合うことは、9年間を見通した教育を進めていくために、英語に限らず、すべての教科において大切なことです。しかし、小・中学校それぞれの段階において発達に即した学習のねらいがあるのであって、どのような学習でも早期に開始すればよいというものではありません。ですから、直接的な連続性を求める必要はなく、小学校で、子どもたちにどのような英語に関わる学習経験を積みしておくことが大切なのか、そして、そうした学習経験を中学校での英語教育にどうかしていくかという視点から、連携が図られていく必要があるのではないのでしょうか。

問20 英語活動を進める上で、各学校が取り組むべきことは何ですか？

「指導計画（試案）」に設定されている学習内容である言語機能の具体表現と語彙とは、カリキュラムの中心部分ですので、これに沿って各校や子どもの実態にあうように指導計画を作成することがまず大切です。

「指導計画（試案）」には、言語機能の具体表現と語彙とを聞いたり、口にしたりする歌・チャンツ、ゲームやクイズなどの補助的活動が複数設定されていますので、それらから子どもの実態にあわせて選択したり、より実態にあうよう作り替えたりすることが必要です。また、中心的活動であるタスクは、他教科で扱われている内容や子どもの学習経験、学校行事を考慮して設定されていますので、それを参考にしてより子どもの実態にあうよう修正して取り組むことも必要です。さらに、これらの活動を行うのに必要な教材は、「小学校英語リソースコーナー」の物をそのまま利用することも可能ですし、これを参考に学校で作成してもよいでしょう。その際に、それらを英語活動用教材棚などに保管し、誰もが使えるよう蓄積していくことが、学校での取組を進めていくこととなります。

問2 1 今後、教育委員会として取り組むことはどのようなことですか？

これまで述べてきたように、現在の英語活動は、各校により様々に取り組まれています。しかし、今後ますます英語によるコミュニケーション能力の育成が求められる中では、すべての子どもたちに等しくその学習機会を保障していく必要があります。子どもが受ける教育が、学校や教員の取組によって異なるということは、こうしたリテラシーとしての教育においては、あってはならないことだともいえます。もちろん、地域や子どもの実態に応じて、各校で工夫されるべきものではありませんが、その中心となるべき学習のねらいや内容は、共通理解されるべきものです。

そのため、教育委員会は、基本となるべきカリキュラム案の提示、各学校が進めていくための条件整備、共通理解を図れるような研修の機会や、実践例の紹介と交流などの取組を進め、小学校英語活動を広げるとともに深めていきます。



問2 2 小学校から英語活動を進めることで、どのような子どもを育てたいのですか？

子どもたちに、自分を大切にしてほしい、つまり自分が生まれてきたことを喜べる人になってほしいと思います。私たちは、いろいろな人との関わり、すなわちコミュニケーションを通して、様々なことを体験し、その中で考えたり感じたりすることで、かけがえのない自分という存在を確認します。そうした自身への確かな認識が、これからの国際社会の中で主体的に生きていく力となります。そのためには、子どもが人と言語でコミュニケーションを図り、関わるのが楽しいこと、素晴らしいことと思える体験が必要です。

ところが、音声による母語の習得がほぼ完成された小学校中学年以上の子どもたちにとっては、日常生活でことさら言語を意識してコミュニケーションをすることはありません。そこで、もっている知識や能力を総動員しなければ、相手と意思疎通ができない言語をあえて使う学習を体験させることにより、子どもたちに改めて言語でコミュニケーションを図ることや人と関わることの大切さ、楽しさに気付かせることができます。英語活動を通して、人と豊かに関わり、かけがえのない自分を大切に育てたいと思います。

【 参 考 文 献 】

- 京都市教育委員会・京都市小学校英語活動実践研究グループ『小学校英語活動 指導計画と活動事例集（試案）』 2002
- 文部省『小学校 学習指導要領』 1998
- 文部省『中学校 学習指導要領』 1998
- 文部科学省『小学校英語活動実践の手引』開隆堂出版 2001
- 文部科学省『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』 2002
- 五島忠久監修『児童英語指導法ハンドブック』杏文堂 1990
- 影浦攻編著『小学校英語教育の手引』明治図書 1997
- 築道和明『英語授業改革双書 No.16 小学生の英語指導』明治図書 1997
- 樋口忠彦他編『小学校からの外国語教育』研究社出版 1997
- 松川禮子『小学校に英語がやってきた！』アプリコット 1997
- H.カーテン・C.A.B ペソーラ著・伊藤克敏他訳『児童外国語教育ハンドブック』大修館書店 1999
- 久埜百合『こんなふうにはじめてみては？ 小学校英語』三省堂 1999
- 渡邊寛治編著『総合的な学習はじめての小学校英語』図書文化 1999
- 荒木秀二・後藤英照編著『小・中・高を結ぶ 英語教育と総合的な学習』三省堂 2000
- 椎名仁編著『ここから始める小学校英語活動』ぎょうせい 2000
- 影浦攻『小学校英語研究開発学校の取組全情報』明治図書 2000
- 子どものしあわせ編集部・編『どうする？小学校の英語』草土文化 2000
- 『英語教育 12月号特集 小学校で行う英語教育』大修館書店 2000
- 後藤典彦・富田祐一編著『はじめてみよう！小学校・英語活動』アプリコット 2001
- 中山兼芳編著『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社 2001
- 長江宏・太田美智彦共著『小学校教師の英語活動Q&A』学校図書 2001
- 『英語教育 2月号 特集 語彙力増強法』大修館書店 2002
- 『kids com 7月号 特集 小学生の英語「基本のキホン」』アルク 2002
- 大津由起雄・鳥飼玖美子共著『岩波ブックレット No.562 小学校でなぜ英語』 2002

英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする
子どもを育てるための22のヒント

小学校英語活動Q & A

執 筆 直山木綿子（京都市立永松記念教育センター研究課研究員）
責任編集 外川 正明（京都市立永松記念教育センター研究課指導主事）

発行日 平成15年2月15日

発 行 京都市教育委員会
京都市立永松記念教育センター

〒600-8023 京都市下京区河原町仏光寺西入ル

TEL 075-371-2705 FAX 075-353-4851

